

浮線文土器群における文様モチーフの 分類と系統についての雑感

—千葉県域出土の精製土器を対象に—

関根有一郎

要旨

浮線文土器群とは、縄文時代晩期後葉から末葉に、東北地方南部から東海地方にかけて広く分布する土器である。その特徴である、浮線によって描かれる網状の文様モチーフは、細別の指標として用いられることが多いが、近年の発掘成果では文様モチーフが長期間にわたって継続的に使用されることが分かってきた。そのため本稿では、千葉県域出土の浮線文土器群を対象に、従来の図像学的観点からの文様モチーフの分類に加え、文様モチーフ表出手法という視点から分析を行った。その結果、先行研究で捉えられてきた文様系統観と一部異なる結論を得ることが出来た。

キーワード：浮線文土器群、千葉県、文様モチーフ表出手法

はじめに

浮線文土器群⁽¹⁾は、縄文時代晩期後葉から末葉に東北地方南部から東海地方にかけて広く分布する土器の総称である。浮線により網目状の文様が描かれる事から命名されたこの土器群は、晩期東北地方を中心に分布する大洞式と同じように西日本でも出土し、広域に移動していた土器であることが確認されている。このことから、該期の集団の動態や交流の実態を明らかにすることは、東日本全体の晩期の動態を推し量る上で必須の作業である。こうした交流関係の解明や、型式細別のためには、その指標となる文様モチーフの分析は欠かせない。先行研究の多くでは、浮線文モチーフの斉一性の高さや資料的制約から、全国的に包括して行われることが多かった。しかしより細かい交流関係のプロセスの解明のためには、広域に分布する属性と地域的に分布する属性の有無自体や、あるとすればその差異について検討する必要がある。

本稿では、千葉県域出土の浮線文土器群を分析対象とし、文様モチーフの分類を行うことで、千葉県域における浮線文土器群の系統関係を明らかにする事を目的とする。またこの際の分析視点として文様モチーフ表出手法を用いる。

1. 先行研究

1-1. 浮線文土器群編年研究略史（第1表）

浮線文土器自体は、戦前から山内清男らにより縄文時代終末の土器としてその存在が知られていたが（山内

1930）、その編年研究については戦後に入り大きく「中部高地（長野）」「新潟・福島」「関東」の3地域を中心に進められてきた。

中部高地ではまず、千曲川流域の晩期資料の検討や長野県氷遺跡出土資料の分析を行った永峯光一により、「氷Ⅰ式」が設定された（永峯 1969）。1980年代に入ると、増加した出土資料を基にした設楽博巳や石川日出志らによる研究により、長野県女鳥羽川遺跡→離山遺跡→トチガ原遺跡という変遷が確認された（設楽 1982、石川 1985）。1990年代にはこうした研究の蓄積や良好な遺跡・遺構一括資料の増加を受け、中沢道彦により「女鳥羽川式」と「離山式」の設定、「氷Ⅰ式」の3細分が行われた（中沢 1998）。現在では「女鳥羽川式」→「離山式」→「氷Ⅰ式古段階」→「氷Ⅰ式中段階」→「氷Ⅰ式新段階」という編年が多くの研究者の間で用いられている（小林圭 2018など）。

新潟・福島ではまず、寺村光晴による「藤橋式」の設定（寺村 1956）や、磯崎正彦による「鳥屋式」の設定（磯崎 1957）が行われた。1980年代以降には、新潟県鳥屋遺跡や同県村尻遺跡の発掘調査結果を踏まえ、石川日出志により「藤橋式」「鳥屋式」の再編成が行われた。その結果、「鳥屋1式」「鳥屋2a式」「鳥屋2b式」が設定され（石川 1988）、1990年代には福島県内の阿賀野川流域である会津地方の浮線文土器群にもこの編年が適応できると提唱した（石川 1991・1993）。また石川は、福島県内でも下屋ヶ地平C遺跡出土の土器群から金山遺跡出土の土器群へと変遷が追えろとし、鳥屋2a式が細分できる可能性を提示した（石川 1991）。現在では、「鳥屋1式」→「鳥屋2a式」→「鳥屋2b式」という

編年が多く研究者の間で用いられている。

関東における最初期の浮線文土器群研究は、北関東（群馬）を中心に藺田芳雄によって進められた「千網式」に関する一連の研究（藺田 1950・1972）や、南関東（千葉・神奈川）を中心に早慶明三大学によって行われた「荒海式」「姥山Ⅴ式・Ⅵ式」「杉田Ⅲ式」の設定（西村 1961、鈴木公 1963、杉原・戸沢 1963）などが挙げられる。1980年代以降、千葉県荒海貝塚出土資料の分析や大洞A式・A'式の研究を推し進めた鈴木正博は、千網式を5期、杉田Ⅲ式を6期に細分した（鈴木正 1985・2006）。1990年代には千葉県における資料増加に伴い、鈴木加津子により浮線文土器群直前段階の型式として「桂台式」「向台Ⅱ式」が（鈴木加 1997）、渡辺修一により「向台段階」「池花南段階」「御山（古）段階」が設定された（渡辺 1991・1994）。両者は共に、千葉県向台Ⅱ遺跡出土資料を遺跡一括資料として積極的に評価しているが、女鳥羽川式と併行関係をとるか（渡辺）、否か（鈴木）によって編年上の位置づけに相違が生じている。

第1表 浮線文土器群編年

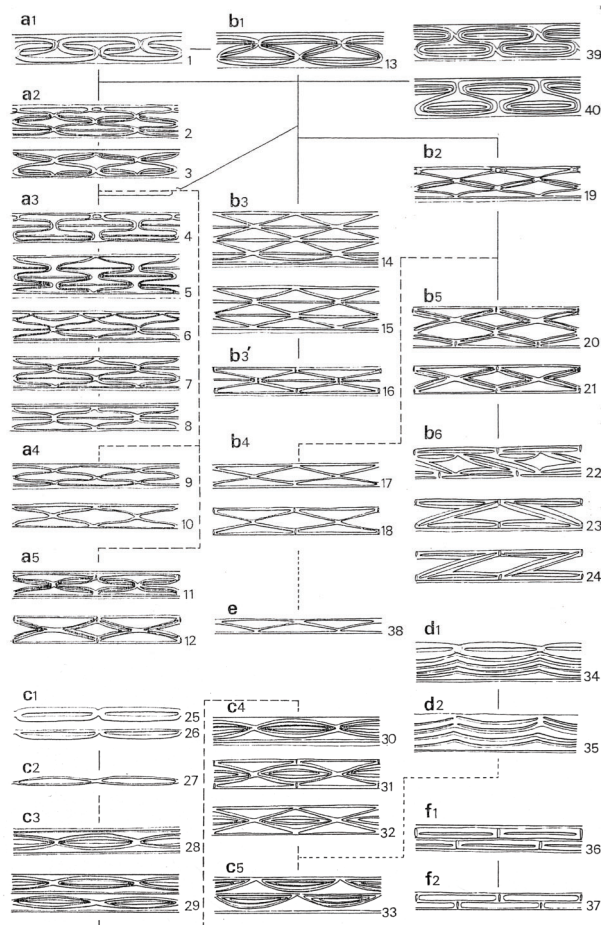
	推定年代 ±BP	中部高地	関東	新潟(上越)	新潟(中下越)	東北
縄文晩期	2700 ? 2600	女鳥羽川式	桂台式・ 向台Ⅱ式	女鳥羽川式	鳥屋1式	大洞A式(古)
	2600 ? 2500	離山式・ 氷Ⅰ式(古)	杉田Ⅲ式・ 千網式	離山式・ 氷Ⅰ式(古)	鳥屋2 a 式	大洞A式(新)
	2500 ? 2400	氷Ⅰ式(中新)	杉田Ⅲ式・千網式 / 荒海式	氷Ⅰ式(中新)	鳥屋2 b 式	大洞A'式
弥生前期	2400 ? 2300	氷Ⅱ式	(境木)・荒海式 ・沖Ⅱ式	氷Ⅱ式	緒立式	青木畑式 ・砂沢式

1-2. 文様モチーフ

浮線文モチーフは、大洞A式の工字文との図形的類似性から、工字文からの系統として捉えられることが多い（永峯 1969など）。

石川日出志は、中部高地の浮線文精製浅鉢を対象に分析を行い、浮線文モチーフを大洞A式古段階の工字文から変化したものと考え、曲線的な工字文から生成される浮線文(a)、直線的な工字文から生成される浮線文(b)、凸レンズ状の構図の浮線文(c)、平行線を縦に断ち切る工字文から生成される浮線文(f)などに分類した（石川 1985: 154-156）（第1図）。そしてa・b類の系統変化の方向性として構図の簡便化を想定、c類については、隆線部に充填する陰刻部の種類（沈線文か菱形の彫り込みか）から、a・b類との併行関係を想定し、文様モチーフの系統・併行関係を設定した。

鈴木正博は、浮線文モチーフを大きく以下の7種に分



第1図 石川日出志の文様系統変遷図

類した。

①千網谷戸型突帯文手法 ②一人子型浮線網状文 ③杉田型入り組み浮線文④千網谷戸C-ES型三分岐浮線文重畳 ⑤荒海J型三分岐浮線文⑥杉田型レンズ状浮線文 ⑦氷型単体連繫浮線文

そして文様系統として①→②→③→④→⑤の流れを想定（⑥と⑦は⑤と同時期異系列）し、千網式を5期に細分する案を提唱した（鈴木正 1985）。またその中でも文様モチーフを構成する文様の系列として、①突帯文（1期では単独だがそれ以降は他の手法と複合化）②曲線文（2期に完成し、入り組み化→重畳化→単純化の傾向をたどる）③直線文（三角文や菱形文を特徴とし、後者は②と同じ変遷をたどる）の3系列に分けられると論じた（鈴木正 1987）。石川・鈴木の分類は、曲線・直線の文様モチーフを系列差として捉える点で共通している。

一方で田部井功は、大洞A式と浮線文土器群の文様モチーフを包括的に分析し、曲線文と直線文を時期差として捉え、前者から後者への変遷を想定している（田部井 1985）。

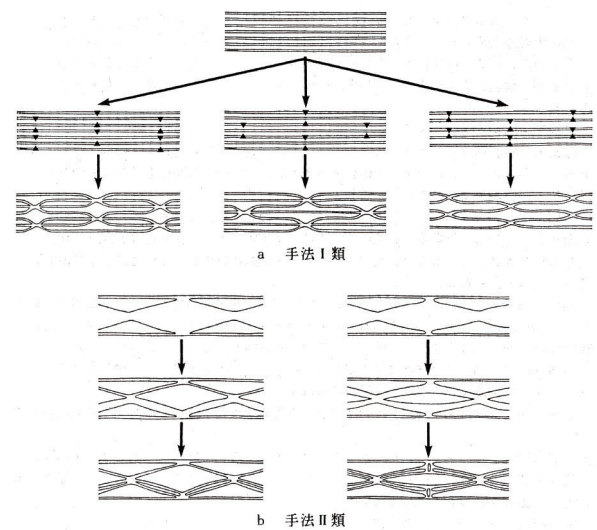
1-3. 文様モチーフ表出手法

文様モチーフの系統関係についての研究は縄文土器型式研究の基本であり、各地の編年や他型式との交流関係を把握する指針として多くの成果を挙げてきた。しかし最近の発掘成果に基づく分析では、大洞式や浮線文土器群の文様モチーフが長期間にわたり存在することが判明しており（大坂 2012、荒川 2004）、文様モチーフのみを基準とする土器の時期決定に対する危険性が指摘されている（大坂 2012）。こうした状況を打破するための有効な分析視点と考えられるのが、文様モチーフ表出手法に基づく分析視点である。

こうした視点から文様モチーフの分類を行った研究者として、小林正史が挙げられる（小林正 1998）。小林は、土器文様の変化の要因を探るために、従来主流であった社会的側面や象徴的側面だけではなく、機能的側面にも着目し、東北中部・南部の土器群の分析を行った。小林は、「文様の時間的変化、地域差、器種差が「土器の形・容量といった文様施文部位に影響する（と考えられる）要素」とどう関連するか」（小林正 1998: 85）を重視した。そのため設定した文様モチーフと文様施文手法、器種、土器の深さ、文様帯幅の関係性を分析している。その結果、大洞C2式からA'式（晩期中葉から末葉）へと浅鉢の比率増加及び小型化に伴う文様が見える部位の狭小化と、施文手法・文様パターンの変化が対応している事を明らかにした（小林正 1998: 89）。

安藤広道は、神奈川県横浜市西之原遺跡表採資料を分析した結果、浮線文モチーフの表出手法には2種類存在することを明らかにした（安藤 1988）（第2図）。まず1つ目は、「数条の平行直線文を描いた後、数箇所適当な位置に集束点をつくる」表出手法（「手法Ⅰ類」）である。この手法の特徴として、「集束点の位置を任意に変化させることにより、バラエティーに富んだモチーフを形成し得る」（安藤 1989）点を挙げている。2つ目は、「断続する沈線、削り出し手法などを駆使することによりモチーフを表出していくもの」（「手法Ⅱ類」）である。この手法の特徴として、「文様の描きはじめよりそのモチーフが決定されている」点を挙げている（安藤 1988: 90-91）。この手法の差異は、中部高地の浮線文土器群においても確認され、中沢は氷Ⅰ式古段階になると後者の文様表出手法が出現するとしている（中沢 1998）。また文様モチーフ表出手法の変化が変遷の画期になりうる点は、中部高地の編年研究だけでなく、浮線文土器群の変遷が層位的に確認できる新潟県青田遺跡の発掘成果からも確認されている（荒川 2004: 263）。

このように、表出手法に着目した分析視角は、細かな



第2図 安藤広道による文様モチーフ表出手法分類

時間差の指標として有効だけでなく、文様変化の要因や定型化する文様モチーフが選択された理由は何か、といった事にまで論を進めることが出来る点で、優れた視点である。

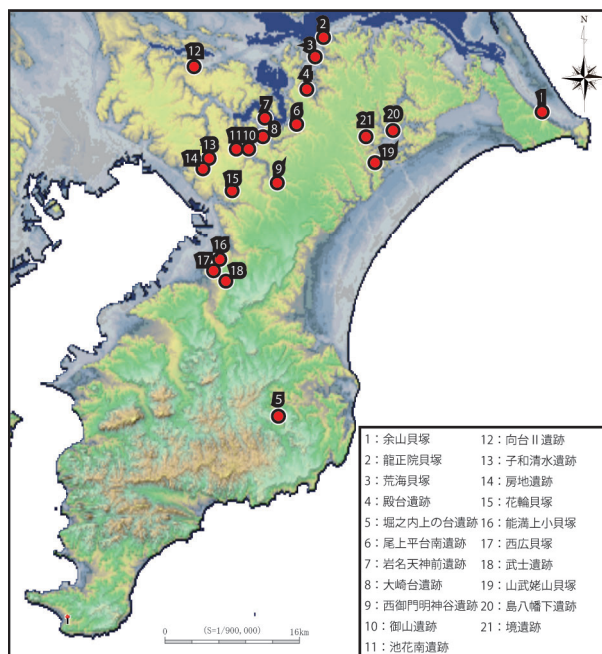
2. 浮線文土器群研究の現状と課題

現在の浮線文土器群研究は、中部高地や新潟・福島に比べ、関東は研究の進展の遅れが指摘されている（中沢 1999）。これは、前2地域に比べて関東では、浮線文土器群盛行期における良好な遺跡・遺構一括資料や層位別資料が極めて少ない点が要因として挙げられる。そのため、型式学以外の方法で前後関係を推定する手段がなく、型式学的に前後関係を推定した後にその系統性を検討するという循環論に陥ってしまいかねない。

こうした状況を打開するためには、ある程度確実な一括廃棄を想定できる事例を基に、連続的に変遷する属性に着目して系統を追う必要がある。こうした属性として、「器形」「文様帯構成」「文様モチーフ」の3つを挙げる事ができる。このうち前2項についての研究は盛んに行われている（石川 1985、中沢 1998）。そこで本稿では、文様モチーフの分類を行ったのち、文様モチーフ表出手法に着目した視点から、その系統と各文様モチーフの関係性についての仮説を提示する。また分析対象として、関東の中でも浮線文土器群の出土量が多い、千葉県域を対象を絞って検討を行う。

3. 分析対象の遺跡と分析資料選択の基準

本稿にて分析に使用する遺跡は第3図に示したとおりである(第3図)。これらの遺跡の中から、本稿で一括資料と判断できるとした事例は2例である。



第3図 千葉県域における浮線文土器群出土遺跡

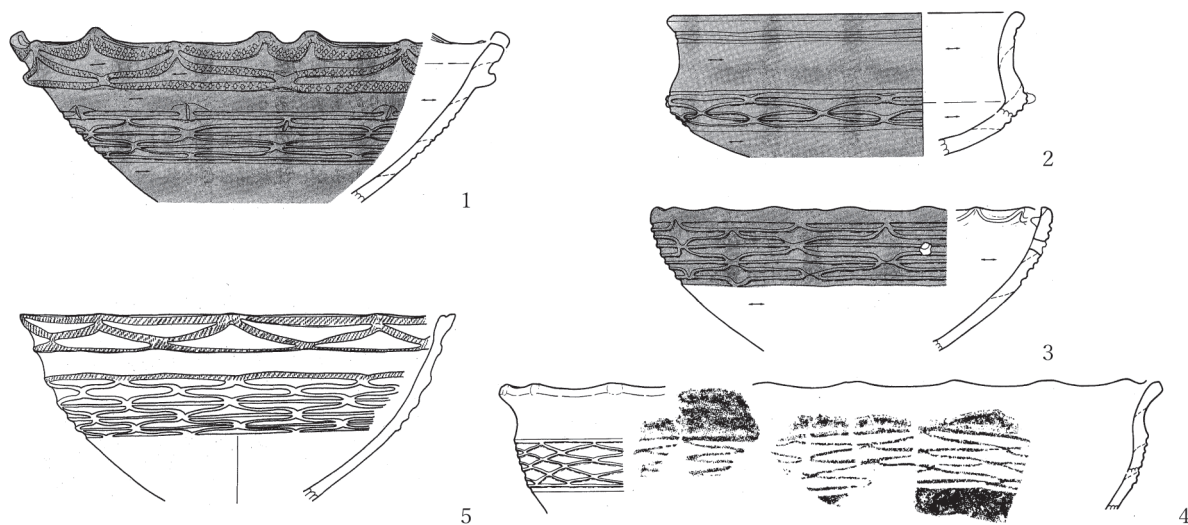
まず1例目は、龍正院貝塚Ⅲ層出土の一括資料である。先行研究においても一括資料として度々利用され、水Ⅰ式中段階の精製浅鉢や、平行沈線文系の浅鉢などが共伴する。2例目は、池花南遺跡のクラスターfである(第4図)。廃棄状況から、その一括性の高さを伺うこ

とが出来る。第4図: 1は、口縁部装飾と文様帯構成の点で福島県下屋ヶ地平C遺跡の1号住居出土資料に類似している。福島県下屋ヶ地平C遺跡の1号住居出土資料は、鳥屋2a式期の基準資料の1つであり、従って池花南遺跡クラスターf出土資料は、浮線文土器群の中でも初期の資料として比定できる。

分析資料の選択に関しては前節で述べた理由から、文様モチーフを判断する必要があるため、口縁部破片や全体の遺存状況が良く器形や文様帯構成が判断できる土器を取り扱った。

4. 文様モチーフ分類試案(第5図)

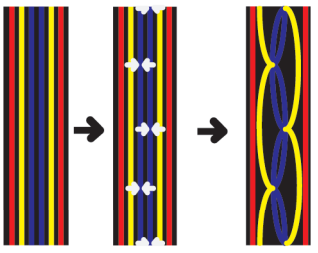
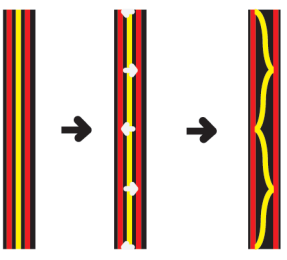
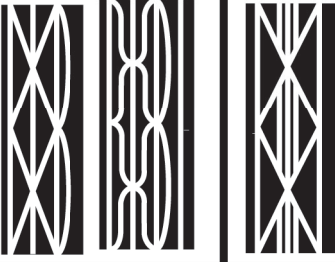
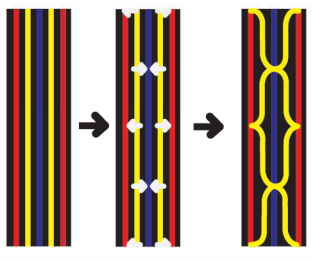
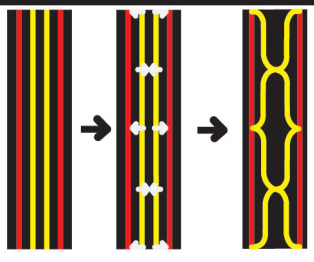
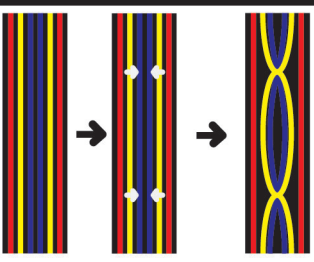
浮線文モチーフは、単位ごとに大きさが異なる例やモチーフがゆがむ例が多く確認されている。この要因として小林正史は、「粘土の移動量が大きい浮線文では、器面が柔らかい状態で文様を施文し、その後の調整をあまり行わないため」(小林正 1998: 63)であると述べている。こうした浮線文モチーフを分類するため、繰り返し施文される文様モチーフを単位文として設定し、5類に分類した。またその変異型と考えられるものを第5図最下段に配置した。先行研究では、曲線文と直線文を系統差として捉える意見(石川 1985、鈴木正 1987)と時期差として捉える意見(田部井 1985)がある。先述の池花南遺跡クラスターf一括資料では、直線文と曲線文の資料が共伴しているため、筆者は両者を系統差であると考え



1～4: 千葉県池花南遺跡クラスターf S=1/4

5: 福島県下屋ヶ地平C遺跡1号住居 S=1/4

第4図 池花南遺跡、下屋ヶ地平C遺跡出土資料

単位文	複段型	変異型	文様モチーフ 表出手法 I 類 (安藤 1988)
A 類			
B 類			
C 類			
D 類			
E 類			

第 5 図 浮線文モチーフ分類案

[文様モチーフA 類：入り組み浮線文]

この文様モチーフは、長野県一津遺跡や神奈川県杉田貝塚、福島県金山遺跡、埼玉県花見堂遺跡などで見られる。弧状の浮線が交互に入り組む形で施文され、浅鉢の体部文様として用いられる。鈴木正博が「杉田型入り組み浮線文」として命名した文様モチーフである（鈴木正 1985）。中部高地において、肩部の眼鏡状付帯文から施文される例が確認されており、千葉県域にも同様の例が存在するが、中部高地と異なるのは、入り組み浮線文を横切る形の浮線を持った文様モチーフは存在しないという事である。また千葉県房地遺跡例では、文様接続部を切ることにより、陰刻部に入り組む工字文を表出している。

[文様モチーフB 類：三角浮線文]

この文様モチーフは、群馬県三ノ倉落合遺跡や茨城県殿内遺跡などで見られる。上下に2本存在する浮線を斜めの浮線によって結合する事で、三角形のモチーフが交互に施される。曲線的なものと直線的なものの2種が存在し、浅鉢だけでなく、深鉢や甕の口頸部文様や肩部文様として採用されることが多い。「凸字状工字文系列」（品川 2003）として知られ、大洞A式にも多く採用される文様モチーフである。しかし本稿では、千葉県武士遺跡例や同県岩名天神前遺跡例など浮線により、単段ないし複段で用いられる例も存在する事から、独立した文様モチーフとして位置づける。変異型として、子と清水遺跡でB類の下部に弧線文が施されている（第6図上段）。この文様モチーフについては次章で詳述する。

[文様モチーフC 類：三分岐ハンガー状浮線文]

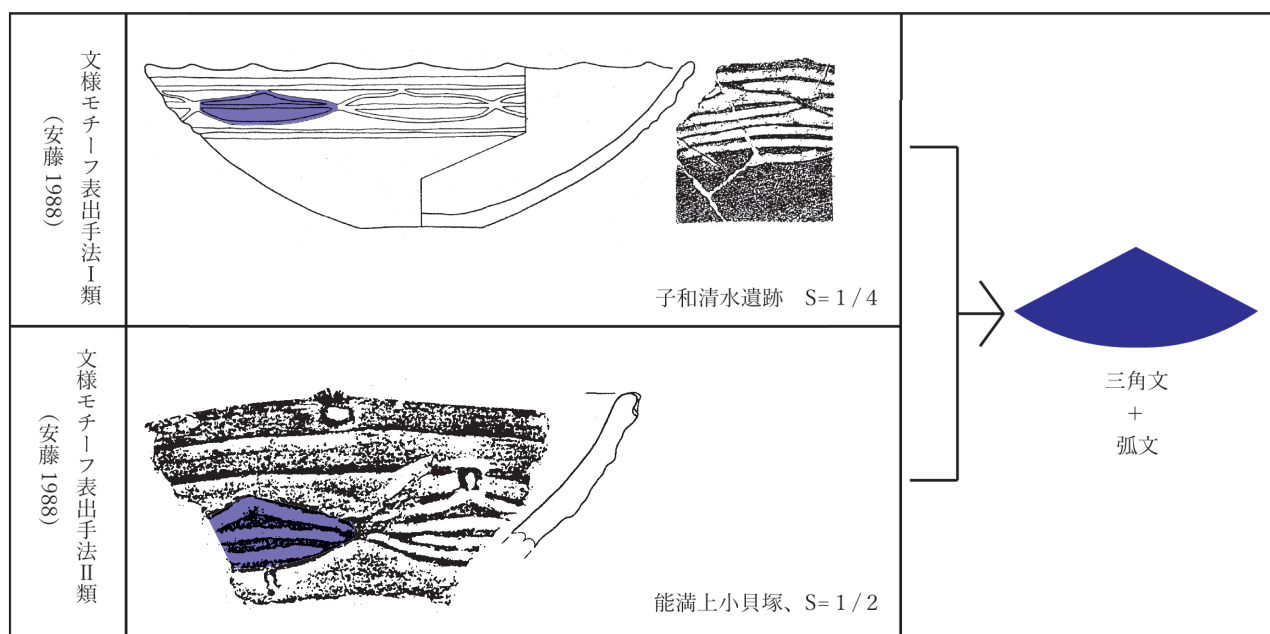
Ca 類：下方の文様帯区画文と接続するもの

Cb 類：下方の文様帯区画文と接続しないもの

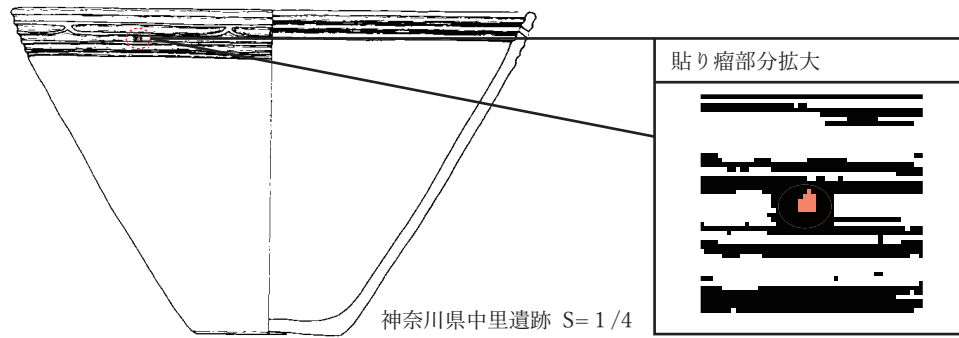
この文様モチーフは、三分岐ハンガー状浮線文や菱形文などと呼称され、浮線文土器群全般において一般的に見られる。上方の文様帯区画文と接続する菱形浮線文の間を、1本の浮線文が横切る事で、三分岐の浮線文モチーフとなる。曲線的なものや直線的なもの、氷I式に多く見られる2条の浮線により構成されるものが存在する。単段や複段、千鳥格子状に施文され、浅鉢や深鉢、甕に付される。本稿では、文様帯区画文と接続する三分岐浮線文のみを三分岐ハンガー状浮線文として、独立させて取り扱う。さらにその中から、下方の文様帯区画文との接続との有無によりCa類とCb類に分類する。変異型として、菱形文の中に数条の浮線が表出されるものが挙げられる。この文様モチーフは、群馬県千綱谷戸遺跡や千葉県島八幡下遺跡、同県荒海貝塚などで散見される。

[文様モチーフD 類：二分岐ハンガー状浮線文]

この文様モチーフは、三分岐ハンガー状浮線文と同じく、浮線文土器群全般において一般的に見られる。菱形状の浮線文が、単段ないし千鳥格子状に施文され、浅鉢や深鉢、甕に付される。他の文様モチーフが体部文様帯に施文される例が殆どであるのに対し、この文様モチーフについては波状口縁を持つ土器において口辺部から施文される例が、荒海貝塚などで確認されている。千鳥格子状の二分岐ハンガー状浮線文は、新潟県青田遺跡の調



第6図 表出手法Ⅰ類とⅡ類で共有される文様モチーフ



第7図 貼り瘤手法

査成果から、鳥屋2a 式から鳥屋2b 式に至るまでの長期間にわたって存続するモチーフであることが判明している（荒川 2004）。

〔文様モチーフE 類：レンズ状浮線文〕

Ea 類：両凸レンズ状浮線文

Eb 類：平凸レンズ状浮線文

この文様モチーフは、杉田貝塚や荒海貝塚、三ノ倉落合遺跡、東京都田原遺跡などで見られ、浅鉢や深鉢、甕に付される。その名の通りレンズ状のモチーフが施されるが、上下両方に凸を持つものと下部にのみ凸を持つものの2種が存在し、鈴木正博は前者を「杉田型レンズ状浮線文」（鈴木正 1985）、後者を「重弧状浮線文」（鈴木正 2006）と命名した。また前者の文様モチーフについては、浮線輪郭内を沈線で描くものと、浮線で表出するものの2種に分類している（鈴木 1985）。本稿では、後者を「平凸レンズ状浮線文」と命名する。千葉県武士遺跡では、氷Ⅰ式に特徴的な、2条の浮線により各辺が構成される菱形文モチーフとEb類が共伴する例が確認できる。変異型として、レンズ状文の接合部において、上下からの浮線のつまみ合わせが完全には行われず、平行沈線が残存するものが挙げられる。こうしたモチーフを持つ土器は、荒海貝塚や子和清水遺跡で確認されている。

次章では、設定した分類案に従い各モチーフの系統関係を探る。

5. 文様モチーフの系統関係

5-1. B類とCb類の関係性

先行研究においてC類はA類である入り組み浮線文からの系統として捉えられることが多かった（鈴木正 1987）。しかしA類からC類への変遷から想定するのはCa類の存在であり、Cb類の存在に関してはこの系統では語りうる事が出来ないであろう。しかしここにB

類の存在を加味するとどうであろうか。子和清水遺跡だけでなく、一津遺跡や殿内遺跡でも変異型とした三角文の下に弧線状のモチーフを持つ例の存在が確認されている（第6図）。また先述のように、岩名天神前遺跡や西広貝塚においては複段の三角浮線文が確認されている。これらのことから、C類の文様構成原理が多段の三角文の表出にあると仮定する。

次に口外帯と明確な頸部無文帯を持つ点から、氷Ⅰ式中段階併行と思われる能満上小貝塚出土の浅鉢（第6図下段）に着目してみよう。この土器に付される文様モチーフは、一見するとE類にも思えるが、体部文様帯全体の陰刻部やモチーフ内部の沈線方向といった文様モチーフ表出手法に着目してみると、B類の変異型とした三角文+弧線文というモチーフを削出する事が目的であったといえよう。

5-2. 貼り瘤手法について

浮線文モチーフの表出手法としては、安藤の提唱したⅠ類とⅡ類による手法が知られてきた。しかし今回の検討では、それ以外の可能性を示す興味深い事例が確認された。それは子和清水遺跡出土の甕である。文様帯下部の沈線の途中で、要所要所に貼り瘤がなされることにより、Ca類風の文様モチーフが施文されている。また神奈川県中里遺跡でも、匹字文の下部に貼り瘤がなされ、最終的な文様モチーフとしてはB類を呈する土器が発見されている（第7図）。こうした現象は、まさに安藤が論じたように、モチーフが定型化され、それが定期的に採用されるに至った結果を表しているのではないだろうか。

また大洞A式では、こうした貼り瘤によって工字文を表出する手法が、後半段階から出現する事が確認されている（小林 1998、品川 2003）。この事実だけで、大洞式との併行関係を論じるわけにはいかないが、今後はこうした手法にも着目して分析を行う必要があるだろう。

おわりに

本稿では、千葉県域出土の浮線文土器群を対象に、その文様モチーフの分析を行った。繰り返し施文される文様モチーフを単位文として設定し、5類に分類した。そして、文様モチーフ表出手法に着目してその系統関係について2つの仮説を提示した。1点目は、B類の一部とCb類の間に系統関係が見られる点である。2点目は、従来考えられてきた2つの表出手法以外にも、貼り瘤手法という別の手法を指摘した。

今回の論考では、全ての文様モチーフについて系統関係を明らかにする事は出来ず、「雑感」を述べた程度のものに過ぎない。今後、段階設定を行う上では、文様モチーフ以外にも器形や文様帯構成との相関関係、さらには肩部文様と体部文様の関係性などについて改めて検討する必要がある。

謝辞

本稿の作成に当たっては、指導教員である早稲田大学文学学術院・高橋龍三郎教授からご指導とご助言を賜った。また、早稲田大学考古学研究室の諸兄にもご協力を賜った。

末筆ながらここに記し、深く御礼申し上げる。

註

- (1) 文様モチーフに特徴があるという性質上、「浮線網状文土器群」という名称の方が正確ではあるが、頁数の関係上、本稿では「浮線文土器群」と呼称する。

引用文献

- 荒川隆史 2004「第Ⅶ章3 青田遺跡における縄文時代晩期終末の土器編年」『青田遺跡(本文・観察表編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 p261-281
- 安藤広道 1988「横浜市西之原遺跡採集の縄文時代晩期浮線文土器について」村上徹君追悼論文集編集委員会編『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会 p85-98
- 石川日出志 1985「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37-4 信濃史学会 p152-169
- 石川日出志 1988「鳥屋式土器の構成と意義」『豊栄市史料編1』豊栄市 p335-352
- 石川日出志 1991「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相 —新発田市村尻遺跡B区の資料紹介を兼ねて—」『北越考古学』4 北越考古学研究会 p9-22
- 石川日出志 1993「鳥屋2b式土器再考」『古代』95 早稲田大学考古学会 p208-225

- 磯崎正彦 1957「新潟県鳥屋の晩期縄文式土器」『石器時代』4 石器時代文化研究会 p22-35
- 大坂 拓 2012「第4章第3節 本州島東北部における初期弥生土器の成立過程 —大洞A'式土器の再検討と特殊工字文土器群の提唱—」『江豚沢Ⅰ』p144-181
- 上総国分寺台遺跡調査団 1977『西広貝塚』早稲田大学出版部
- かながわ考古学財団 1997『中里遺跡(No.31) 西大竹上原遺跡(No.32)』かながわ考古資料刊行会
- 小林圭一 2018「亀ヶ岡式土器とその年代観」『季刊考古学別冊25号「亀ヶ岡文化論」の再構築』雄山閣 p28-35
- 小林正史 1998「土器の文様はなぜ変わるか —東北地方の縄文晩期後半の単位文様を例として—」『氷遺跡発掘資料調査図譜第3冊』氷遺跡発掘資料調査図譜刊行会 p47-91
- 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1987『大崎台遺跡Ⅲ』財団法人市原市文化財センター1995『千葉県市原市能満上小貝塚』福山通運株式会社・武蔵屋商事株式会社・財団法人市原市文化財センター
- 財団法人印旛郡市文化財センター 1991『向台Ⅱ遺跡』
- 財団法人千葉県文化財センター 1990『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』
- 財団法人千葉県文化財センター 1991a『銚子市余山貝塚』千葉県土木部
- 財団法人千葉県文化財センター 1991b『四街道市内黒田遺跡群』第2分冊 千葉県住宅供給公社
- 財団法人千葉県文化財センター 1994『四街道市御山遺跡(1)』第2分冊 住宅・都市整備公団
- 財団法人千葉県文化財センター 1996『市原市武士遺跡1』第2分冊 千葉県水道局
- 財団法人福島県文化センター(遺跡調査課) 1986『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会
- 設楽博己 1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34-4 信濃史学会 p335-377
- 品川欣也 2003「器種と文様,そして機能の相関関係にみる大洞A式土器の変遷過程」『駿台史学』119駿台史学会 p97-134
- 杉原荘介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2-1 東京考古學會 p17-48
- 鈴木加津子 1997「桂台式」考 —利根川下流域の浮線文以前—『利根川』18利根川同人 p38-43
- 鈴木公雄 1963「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』36-1 三田史学会

p67-94

- 鈴木正博 1985 「「荒海式」生成論序説」 滝口宏編『古代探叢Ⅱ —早稲田大学考古学会創立35 周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部 p83-136
- 鈴木正博 1987 「続大洞A2 式考」『古代』84早稲田大学考古学会 p110-133
- 鈴木正博 2006 (1985提出) 「三河・尾張に於ける浮線文系土器群の編年的位置について」『いちのみや考古』20一宮考古学会 p51-82
- 藺田芳雄 1950 「千網谷戸石塚調査概報」『両毛古代文化』2 両毛考古学会 p1-20
- 藺田芳雄 1972 『千網谷戸C-ES 地点の調査』両毛考古学会
- 田部井功 1985 「縄文晩期・浮線文土器の研究—文様の構造と系統について—」 滝口宏編『古代探叢Ⅱ —早稲田大学考古学会創立35 周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部 p63-82
- 千葉市教育委員会 1987 『子と清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡』
- 寺村光晴 1956 「新潟県三島藤橋遺跡」『上代文化』26国学院大学上代文化研究会 p43-50
- 中沢道彦 1998 「「氷1 式」の細分と構造に関する試論」『氷遺跡発掘資料調査図譜 第3 冊』氷遺跡発掘資料調査図譜刊行会 p1-21
- 中沢道彦 1999 「中部地方 晩期（浮線文土器群）—氷Ⅰ式を中心に—」『縄文時代』10-2縄文時代文化研究会 p85-103
- 永峯光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9 石器時代文化研究会 p1-54
- 成田市郷部北遺跡調査会 1984 『成田市郷部北遺跡 調査概要（加定地・殿台遺跡）』
- 西村正衛 1961 「千葉県成田市荒海貝塚（予報）」『古代』36早稲田大学考古学会 p1-18
- 堀之内上の台遺跡発掘調査団 1979 『千葉県夷隅郡大多喜町堀之内上の台遺跡』千葉県夷隅郡大多喜町教育委員会
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1-3 東京考古学会 p1-19
- 渡辺修一 1991 「南関東地方における畿内第Ⅰ様式並行期の土器群とその変遷」第1 回東日本埋蔵文化財研究会実行委員会編『第1 回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容 —第Ⅰ分冊 研究発表概要・追加資料—』東日本埋蔵文化財研究会 p68-83
- 渡辺修一 1994 「Ⅷ補論 縄文晩期終末から弥生中期前半の土器群について」『四街道市御山遺跡（1）』千葉県文化財センター p164-177

図表出典一覧

- 第1 図 石川1985より引用
- 第2 図 安藤1988より引用
- 第3 図 カシミール3Dを用いて筆者作成
- 第4 図 財団法人福島県文化センター（遺跡調査課）1986と財団法人千葉県文化財センター 1991bを用いて筆者作成
- 第5 図 筆者作成
- 第6 図 財団法人市原市文化財センター1995と千葉市教育委員会 1987を用いて筆者作成
- 第8 図 かながわ考古考古学財団 1997を用いて筆者作成
- 第1 表 小林圭2018を一部改変